

福寿草

由比 和子

(一)

両側に並ぶ桶屋の板戸はどこもきつちりと閉まり、軒下の暗闇が昼間の賑わいを飲み込んでいる。それでも板戸の節穴から漏れる微かな光から、夜なべしている桶職人の熱気を感じて、世津はほつとする。月の光をたつぷりと吸った桶屋町の道に、帰路を急ぐ世津の影が刻まれていく。

「こんな月の晩は提灯はいらないくらいだね。お月様は心強いよ」

世津は、殊の外妖艶な輝きを放つ大きな月を見上げ口走る。ひとり歩きの不安を追い払うように、提灯を大仰に左右に揺らし、更に足を急いだ。まだ暮れ四つになっていないが、もう盗人が潜んでいてもおかしくない刻だ。

れ枝のような男の赤子を放心して見ていただけであった。勿論、駕籠は期待できない。世津はそつとその場を離れ、夜道に押し出されるようにして帰ってきたのだった。

それでも御新造さんが無事でよかった、と世津は思う。明日はその祝いの赤飯が近所に配られるはずだ。武家に跡目がいなけりや、養子の来てはいくらでもあるというのにあの痩せた御新造さんは男子を産むまでがんばるつもりだ。枯れ枝の男子を見ても涙することなく、じつと虚空を見つめた眼が強い意思を表していた。

それにしても、まだまだ修行のいる生業だ。

「そなたのお産は天性のものだったよ。すぐ産まれたのは息の吐き具合が上手だったからさ。むやみに力むのは死産のもとだよ。根尽きて眠ってしまい駄目になってしまふのさ。この道に入って、息遣いを伝えて欲しいのだよ。大変だが、張りつめた仕事してりや、気も紛れるというもんだよ」

千人近い赤子を取り上げてきたきんに、二年前のたった一度のお産を見込まれ産婆の道を継いだものの、人のお産は別物で、てこずるばかりだ。第一息遣いなど、その時無我夢中で全く覚えちゃいない。教わることは多々あったのに、継ぎ手ができて安堵したのか、きんは昨年暮れ、こ

朝方、出掛けに下男の風吉が、「おいらがお供しましよつか」と言ってくれたが、小腹の五人目のお産ならば早くすむとたかをくくり、こんな夕刻までかかるとは思っても及ばなかった。お産も間が四年も開くと、中の肉が固くなるのが難産だった。腹をさすったり押ししたり、やっと出てきた赤子は産声も上げず、二度びくっと動いて息絶えた。

困った世津は、昨年亡くなった産婆さんから教えられた待ち望まれた赤子が死産の時の謝罪をこめた言葉かけを思い出した。

「力が及びませぬで申し訳ございませんでした。鄭重に葬つておやりくださいまし。この子の御霊はまだ御母の腹の中に残されたまま、必ずや次に美しい人の御姿となって、無事産まれてくることをお祈り致します」

世津が頭を畳に擦り付けるのをよそに、家族は息せぬ枯

とつと逝ってしまった。

産婆として駆け参る時は確かに気は紛れるが、三年前突然家を出た夫征一郎のことに思いが及ぶと、やはり止まり木のない鳥のように落ち着かない。

「戻ってきてくれるのかしら。もしそうだとしても、いつのことやら」

胸中に暗雲が広がる。それを払いのけようと、世津は尚も提灯を左右に振り凜と澄んだ月を仰ぐ。きりつと上げた眉に世津の気丈さが滲み出ている。春の宵の生ぬるい風が慰み撫でるように世津の襟元で遊んでは去っていく。火の用心の柏木を打つ高い音が響く外はしんと静まりかえっている。

おや、向こうから誰かがやってくる。ゆったりした足取りと天正祿のいでたちからして、見回りの同心のようだ。きれいに剃り上げた月代が月の光を受けて白く染まっている。同心は世津の前で足を止め話しかける。

「このような夜更けに女人の一人歩きは無用心ですぞ。この頃は辻斬りや押し込みが頻発しており、我ら同心仲間が目明かすと共に見回っておるのだが、この先お一人で大丈夫でござるか」

同心の顔は異様に突き出た額の蔭になってよく見えない

が、鈍く光を帯びた眼が世津を咎めている。

「はい、産婆の仕事を終え、もつじき番丁の我が家に着きます故、大丈夫でございます」

目前に立つ同心の体軀が安堵を促す。

「それはごころづ。気を付けて帰られよ」

同心は身を引き締めるように腰に携えた十手に手をかけ世津の脇を通り過ぎて行く。いつもは下女兼道具持ちのまつを伴うのだが、息子の矢之助がかぜ気味のため、まつに家において貰い、ひとりで赴いたのだ。

振り向いて後ろを見ると、同心が立ち止まって世津を見守っている。ありがたいことだ。先程遠くに同心が目に入った時、もしかや征一郎やもと胸が疼いた。通りすがりの男に夫を重ねることをこれまで幾度繰り返してきたことか。

夫の不在に気丈に耐えていながら、夫に会いたいと望んでいる自分に気づかされるのだった。親同志が決めた縁で夫婦になり五年足らずの淡々とした生活ではあったが、いざ失うと、征一郎の世津の中に残したものは思いの外重い。

世津は、矢之助のためにも早く親子三人で暮らしたいと望んでいる。それなのに、征一郎へすぐ戻って来て欲しいと懇願しない冷静な自分が、世津にはわからなかったし、もどかしくもあった。

番丁に入り、二つ目の辻から右に曲がった時、目明かし

とすれ違つ。下級の武家屋敷三軒目が我が家だ。屋敷の前に立つ世津は長屋門を叩く。小走りにやってくる風吉の足音がする。門が引かれ門が開く。

「ご苦労様でした。あんまり遅いので心配していました」

風吉の日に焼けた笑顔に白い歯が浮き上がる。世津の肩から力が抜け、疲れが吹き飛ばぶ。

「しつかり閉めておくれ。この頃は押し込みが多いらしいからね。もつとも何も盗られる物はないけどね」

「大だんな様の刀があるじゃないですか」

どこぞ潜んでいるやもしれぬ押し込みに聞かれぬように、風吉が声をひそめる。

「そつだつたね」

確かに今は亡き舅が名刀工に拵えさせたという刀が床の間に武家の象徴のように飾ってある。あの刀を失えば、この小さな古い屋敷はなんの変哲もない家にすぎない。

世津は風吉が門を掛けるのを見届け、玄關への丸石の上を歩く。草履の粹な色の鼻緒が暗がりには浮かび上がる。矢之助はもう寝ただろうか。風邪の具合はどうだったか。世津は逸る気持ちを抑え玄關の戸を開ける。世津の帰りに気づいたまつが手燭を持って三和土にやってきた。

「矢之助の具合はどうかえ？」

「お熱はないようです。ほんの今し方眠られました。お湯は使われますか」

手燭の明かりが隙間風にふるえて、まつの細い影が揺らぐ。

「よかった。矢之助が眠ったのなら、ゆっくり手足が洗えるね」

世津は薄暗がりの中にぼんやりと木目の浮いた三和土に吸われるように腰を下ろす。じぎ、まつが濯ぎ桶に湯を入れて持ってきた。

「まつ、もつこはよい。「くろづつでした。早く寝なさい」

まつは世津の手燭に火を継ぎ、頭を下げる。踵を返す時慌てた素振りでも振り返る。手燭の火が大きく揺れ、まつが口を開く。

「今朝方御新造さんが出られた後、柳田様がお越しになりました。御不在を知るや、また来ると言って帰られました」

「そつかい、何のお話だろつね」

柳田様の来訪は久方ぶりのことだ。征一郎が出て行った当初は、務めが同じ小納戸衆だったことで気を遣い朝な夕

な顔を見せていたが、半年前姑佐乃が亡くなってからは、姿を見せなくなっていた。人伝に聞くところによれば、誤解を招くような噂を恐れられたらしい。

世津は手、足と順に湯で洗い終え古布で拭き、矢之助の寝ている納戸へ向かう。襦をそつと開け中に入る。手燭の火を行燈に移し、ふつと息を吹きかけ手燭の火を消す。小袖を脱ぎ寝着に替える。まつが敷いてくれた床に体を滑り込ませる。傍らで小さな寢息を立てている矢之助がいとおしく、そつと頬に指を触れる。柔らかい髪が行燈の光で金色に染まり美しい。しつかりした目鼻立ちはこの私に似ていると、佐乃は言っていた。顔の輪郭と口元は父親似だと世津は思う。

征一郎は矢之助が産まれていることは知っているはずだ。とつくに文で伝えていた。五年ぶりに産まれた子供に会いたいと思わないのだろうか。それ程までに生まれ育った家が大切なのか。この武家に養子として引き取られて以来の生活は、征一郎にとって単に根付くことのない長旅のようなものだったのか。

今も衣桁に掛けている征一郎の若草色の袴に、時折隙間風に揺れる行燈の灯が映る。ふわつと揺れる淡い光の陰影は、我ら夫婦のようだと世津は思う。矢之助という光の芯

がありながら熱く燃え盛ることができない。微かな風にも忽ち消え入りそうな儚い炎。それが我ら夫婦の絆。世津は堪らなくなつて、行燈の灯を吹き消す。闇に浮かび上がった天井の梁を見ていると、征一郎がいなくなつた朝が甦つてくる。

あの朝、外は雪が降っていた。家中捜してもいないことに慌てふためき、征一郎が懇意にしていた柳田様の屋敷へ風吉を走らせる。柳田様は登城前こちらへお出向かれた。「昨日一緒に下城した折には、家出するような素振りはお見つけしなかつたのだが、まさか拐かしではあるまい」「布団をきちんと畳んでおりましたので、そのようなことはないと存じます。そばに床を並べておりながら、まったく気づかなかつたのでございます」

世津は狐憑にあつたようにぼんやりそう言つた後、昨日のことに思いを馳せる。征一郎は普段と変わらなかつた。朝いつもの如く明け六つに起き、かゆとかつお菜の汁物の朝餉をすませ登城した。決まつた時刻に帰宅し、庭を少し歩き、そつえば福寿草の鉢の前にしばし立ち尽くしていた。「夕餉の仕度ができました」のまつの高い声に返事をし、縁側から上がり居間にきた。「畢手の煮つけがおいし

「これが、文机の上に書物で抑えるようにしてございました」

まつが差し出した封書の表書きは「世津殿へ」と記されている。世津は早くもどこか遠くに投げ出されたような虚ろな気持ちになる。震える指で封を開け一枚の墨書きを広げる。病み臥せていた姑佐乃が家中の異変に気づき、這い出してきて文を読み上げるのを待っている。

「突然之家出御許し願ひ難く候、拙者之父上重病相成り候にて、しばし浜江行き、父上之看病致し度候、勝手越御許し被下候」

浜とはどこぞ、文を読み上げた世津は困惑する。それに呼応するように佐乃が口を開いた。佐乃は乾いた唇を舌で一度なめ話し始める。

「浜は、征一郎の生家のある台入という海辺の村のことだよ。征一郎は、そこから時折遠出してくる花やの振り売りから貰つた子だよ。もう二十年前になる。丁度元服前の長男が、元々蒲柳の質じゃつたが、心の臓の病で死んだ。気を落とし食も喉に通らぬ毎日じゃつたが、ある日花やが入つてきたのだよ。威勢のよい声を上げてね。振り板には黄色のというより金色に近い小さなめんこい花の鉢が並べてある。何の花かと尋ねると、「福寿草」と、鉢の積み下ろ

い」と頬をほころばせ、一合の酒を飲み、早々に床についた。征一郎の一連の所作をめぐりしく思い起した後、世津はふと体の芯に残つた征一郎のあとが潤むのを覚える。おもいがけず久方ぶりに求められたのは、別れのしるしだったのか。

「いずれにしても、これから登城して小納戸頭に御報告致さなくてはなりません。それはすぐにお上へ通じるでしょう。藩庁の許可も得ず仕官を放棄されたとなると、ことは問題です」

柳田様は持ち前のすずしい眼に苦渋の色を滲ませ、玄関につくねんとお立ちになつている。ふと視線を落とすと、袴下の草履からはみ出た右足の親指の先が、小石にでもぶつたのか血が滲んでいる。足袋も履かずに余程急いで来て下さつたのだ。

「なにぶんにもご寛容な措置を賜ります様、お口添えをお願い致します」

世津はそれだけ言つのがやつとだった。

「しかし、何故家を出たのか分からぬまま、どう御報告申し上げてよいのか……」

柳田様の腕を組み首を傾げるお姿にご迷惑の程が窺える。突如まつが一通の封書を持つてきた。

しを手伝っていた子供が答えた。その子供を夫征八が大層に気に入って、養子にくれなやかと花やに相談を持ちかけたのだよ。すると花やは大喜びさ。食い扶持がひとり減るのだと言つてね。その場で養子縁組成立さ。うれしかったよ。天が抜けるとはこの事だと思つたよ。頭の上に覆い被さつていた塊がいちどきにとつばわれたような、心の中がぱつと明るくなつたのだよ」

佐乃の目が深い皺の中で輝いている。乾いた唇を再び舌でなめ話しを継ぐ。

「私もじい様も、名を征一郎とし、かわいがつた。大事に育てたつもりだったが、とつに母も無く実の父のことが頭から離れなかつたのだらうね」

佐乃は大きく溜息をつく。まだ何かを語りた素振りをするが、病に冒された体は話を続ける事も難儀で、まつに手を引かれ床に戻つた。開け放した玄関から入り込む寒風が立ち尽くす面々の間を吹き抜ける。そう言えば……と、風吉が遠慮がちに話し始めた。

「御主人様は、毎年年末福寿草を花やの振り売りから一鉢求めてございましたが、昨年の暮れ、ひとしきり花やと話し込まれている御姿をお見かけました。おそらく、その同業の花やからお父上のご病氣のことをお知りになつたので

しよう。ご心配が高じて発作のように家を出られたのだと思います。ふと頭によぎったことを話しました。我が勝手な臆測をお許し下さい」

風吉は意見したことを詫びて深く頭を下げた。

「兎に角、これから登城して御報告申し上げねばなりませんまい。征一郎殿から事前に休官する旨一札認めておられるやもしれませぬ。それも確めませぬ」

柳田は、案ずる暇も惜しむように踵を返し外に出た。すっかり昇った日に光る雪に眩しく眼を細め、既に家々の下男が雪かきした道を小走りに戻った。

それから二ヶ月程経った時だった、孕んだことに気づいたのは、気分がすぐれず体がだるいのは、征一郎の突然の出奔に気が滅入ったせいだと思っていたところへ、まつから「赤飯炊きましようか」と婉曲に言われ、その日の内に産婆さんに診察を乞うたのだった。

「もつ、三ヶ月に入っておる。大事にして無理せんこつた」

きんの言葉に一筋の光が見え、喜びに震えた。跡目を産めば、家禄が絶やされることはない。世津は必ず産もつと誓った。その後、月ごとの診察が楽しみであった。ふくらみが増すこともさる事ながら、きんの柔らかく温い手の平

が腹部に心地よく、親の肌に飢えた子供にわが身を例え、情けなくなつたものだった。きんは世津の気持を慮つて言った。「子供は是非産んでおくれ。決して裏切ることはないよ」と。

世津は、布団から出ている矢之助の小さな手をそつと手の平に包み込む。熱は下がっている。よかつた。今は、この子のおかげで三十石の家禄が下りてくる。百五十石から大幅に減らされて生活は苦しいが、矢之助にだけは十分に食べ物を与えてきた。頼もふつくらとして、まだ大きな病ひとつしたことがない。世津は、矢之助の手をそつと布団の中に入れる。

それはそつと、柳田様は今日、何を伝えに來られたのか。征一郎の不在はもう三年近く続いている。いよいよ、お上の寛大な措置も限界にきたのやもしれぬ。この屋敷を出ていかねばならないとなると、武家としての道も危ぶまれる。世津は、悪い方ばかり考えが高じていくのが辛く眼をつむつた。まもなく疲れた体は眠りの中に吸い込まれていった。

(二)

と包み安堵を与えるものであった。矢之助に笑いかけている風吉が、この頃声変わりした声を更に低くして言った。

「やっぱり血のつながりは強いものですな。矢之助様も花を好まれていきますから。御主人様の福寿草、来年も花が咲くとよいですね」

庭の隅を見やると、十鉢の花期を終えた福寿草が並んでいる。征一郎が今流行りの朝顔よりも地味だがきりつと小ぶりの福寿草を好んでいたことは知っていた。毎年春になると花が庭の隅で遠慮がちに咲いていたこともわかつていた。元日草の名にふさわしく福を呼ぶように明るく、それでいて清楚であった。しかし、水やりしたことは一度もなかった。

主のいない今も枯れずにあるのは、風吉の手入れのおかげだった。世津は初めて気づいた。夫の愛でていたものに心を寄せようとしなかったことに。世津の体の中に淋しい風が吹きぬける。思わず襟元を抑える。風吉が世津の心情を察して俯き、矢之助の頭をゆつくり撫でている。

「きつとその内に戻られますよ。花を愛でる御方が御新造さんと矢之助さんを捨てられるわけじゃないですよ」

「そうだね。お前がいてくれて本当に助かるよ。ありがとう」

福寿草
世津は、日に焼けすっかり若者に成長した風吉に眩しい視線を向ける。縁側の端に腰を下ろした風吉の体から汗の匂いが鼻をつく。それは不快ではなく、むしろ、抑え込んだ若い力が遠慮がちに噴き出したもので、世津をやんわり

縁側に柔らかい陽射しが溢れている。世津は花のおもちや絵を広げ、指で差しながら矢之助に言葉を教えている。三尺四方のおもちや絵には、さまざまな鉢植えの花が所狭しと色鮮やかに描かれている。美しい花弁の色が矢之助のまだ何の穢れも知らない無垢な瞳を喜ばせるのか、特に花のおもちや絵を好む。世津が言った後、矢之助が片言でまねる。「さくら」「ちやちゅう」「うめ」「ゆめ」「きく」「ちぢゅ」「ふくじゅそ」「しゅしゅちゅちゅ」

愛らしい矢之助の口元に、つい世津も笑みがこぼれる。「矢之助さんは覚えが早いですね」

茄子植えのため畝作りしていた風吉が、鍬を置き縁側に来た。少しでも家計を助けるため、庭の一部を耕して野菜を作ってくれている。大根葉とねぎが風に揺れている。

「どつどつ絵は恐がって見ようとはしないけど、花は好むのよ」

世津は、日に焼けすっかり若者に成長した風吉に眩しい視線を向ける。縁側の端に腰を下ろした風吉の体から汗の匂いが鼻をつく。それは不快ではなく、むしろ、抑え込んだ若い力が遠慮がちに噴き出したもので、世津をやんわり

世津は、汗がひいた後のさわやかな風吉の笑顔に誘われて深く頷いた。それを汐に風吉が畑に戻る。

世津が興入れした時、風吉はまだ幼さの残った子供だったが、今ではすっかり筋骨逞しい男衆（おとし）に成長している。佐乃の話によると、村里の飢饉で家族を失い食べ物求めて城下町へ迷い込みさまよっていたところを征八に拾われ、以来下男としてこの屋敷で暮らしている。

征一郎の仕官放棄で家禄が激減するとわかった時、風吉は頭を地に擦りつけて暇を出さないでくれと懇願した。自分には帰る所がない。この町を出ることは恐ろしい。父母弟妹が餓死していった様は思い出したくないと言ったのである。

十分に食を与えることはできぬがそれでもよいかと念を押すと、風吉は綱のように体を起こした。忽ち眼が潤み大きな手で顔を覆った。爾来、薪割り、走り使い、野菜作り、矢之助の相手と今では欠ける事のできない存在である。

それに、と世津は深い吐息をつく。風吉がいなかったならば、矢之助を産み、母としての喜びを得ることはできなかった。

あれは、孕んでいることがわかり必ず産もうと意を強くしたにもかかわらず、朝からつわりがひどく、それに追いつ

討ちをかけるように征一郎が一札も認めず藩庁の御許しを得ていなかったことを柳田様から知らされた日のことだった。

いち時に気持ちが悪がり、夜、床に入った後不安にさいなまされた。暗闇の中、床から這い出し庭に裸足で下り石を探していた。赤子の頭大の石を拾い上げ、下腹に打ちつけた。この先どうにでもなれ、下腹めがけて打ちつける。周りのものが何も見えない。腕にこめる力だけに集中する。

歯をくいしばっても漏れる嗚咽と下腹に食い込む鈍い石の音は、闇を伝って下男小屋の風吉の耳に届いていた。風吉が飛び出してきて、世津の手から石を取り上げた。

「御新造さん、やめてください。自分をいたぶるのは……せつかくの赤ん坊産まなきゃ駄目ですよ」

風吉は石を放り投げ、世津の両腕を掴む。掴んだ両腕を引き寄せ、思わず世津の体を抱き締めた。世津は目をつむり、しばし風吉に寄り掛かっていた。涙が頬を伝い、風吉に支えられていなかったならば崩れてしまっただった。

風吉の体の匂いが妙に世津を落ち着かせる。

世津は、はっと風吉から体を離し、涙の溜まった眼で空を見上げた。雲ひとつない夜空には無数の星が瞬き、それが涙でばやけ、幾筋ものきらめく川のように映じる。

「奥に通しておくれ」

まつが小走りに玄関へ戻る。世津は、いよいよこの屋敷を出ていかねばならないお話やもしれぬと胸が騒いだ。主がいなくとも跡目の矢之助のおかげで三十石の家禄は下りているが、もしこの住み慣れた屋敷を出て行くとなると不安この上ない。世津は案じを振り払うように、おもちゃ絵に飽き、むずがっていた矢之助をかき抱き奥座敷へ向かう。「お久しゅうございます。昨日は不在致し、申し訳ございませんでした。征一郎のことで何かと御尽力賜り、感謝致しております」

柳田様の前に座った世津は矢之助を膝の上に置いたまま頭を下げる。毅然と背筋を伸ばした柳田様は目にも鮮やかな藍染めの袴を召され、それがはつとする程御仁を颯爽と見せている。矢之助をあやす言葉もないところをみると、やはり憶測通りのお話に違いない。世津の中に緊張が走る。「本日は今日は非番で朝早く出てくるつもりでしたが、急用ができて遅くなりました」

柳田様は唾をぐくりと飲み込み言葉をつないだ。

「訪ったわけは外でもないのですが、征一郎殿がこのままお戻りにならぬとなれば、それなりの処遇を受けることになりましょ。来年の春までに戻らなければ、御公儀の

あの晩、風吉が飛んできてくれなかったならば矢之助との生活はなかった。世津は鎌を下ろす風吉の姿に眼をとめ、裾の擦り切れた野良着はもう替え時だと思った。

不意に玄関に訪う男の声がする。

「御新造さん、柳田様がお見えてございます」

裏で洗い物をしていたまつが前垂れで手を拭きながら世津に告げた。

用意した武士長屋へ転居を強いられることになるやもしれませぬ。この私もこれまで色々と手を尽くしたのですが、なにぶんにも手前勝手な御行為、お咎めを受けても、それは致し方のないこと。ところによっては浪人が溢れ、再仕官にありつこうと城門前で切腹覚悟で申し出ているとの話が耳に入ります。士官の御自覚が足りなかったと言われてもしかたありません。今一度征一郎の真意を確かめるまではと迫つたのですが、御公儀の寛容な措置にも限りがあるようです。かたじけない」

柳田様は畳の上に拳を作つて頭を深く下げた。尖つていゝるが形のよい鼻筋が誠実さを表わしている。世津は覚悟していたものの、現実を付きつけられると落胆の色が隠せなかつた。寝入つた矢之助を座布団の上にとつと寝かせ、世津は重い口を開く。

「これまで本当にありがとうございます。何とお礼を申し上げてよいのやら。一度征一郎を訪ねなければと思いつつ、なにぶんにも乳飲み子を抱かえた身、不精致しておりました。考えますに、征一郎が一番辛いと思います。病み伏せる実の父を放つておくことはできません」

世津は溜息をつく。柳田様もつられるように深い吐息をされた。

「この私の方こそ休職を申し出、台入へ赴き真意、いや説得せねばと思ひます。なに、通行手形のいらぬ同領内のこと、数日もあれば事は済みます。奥方に代つて成すべきだと思ひます」

柳田様は同室だったことで、いつまでも責任を負おうとなさつてゐる。今矢之助も二歳になり、まつに預け遠出できないことはない。

「私が訪ねたいと思ひます。居所もわかつております故、会えば進展があり、それなりの覚悟もできます」

「やはり、そうなされますか。奥方が行かれるに越したことはありません。お供はこちらで適宜な女人をさがしてみましよう」

柳田様は口辺にほつとした笑みを浮かべ、まつが出していたお茶をぐいと飲み干された。

「よろしくお願い申し上げます」

頭を下げる世津に柳田様は深く頷かれ、

「このようなかわいひ御子があるというのに」

と、ぐつすり寝た矢之助の頬に指を触れた後立ち上がり、闊達な足取りで玄関に向かわれた。見送る世津とまつに目礼し、既に中天に上つた陽の眩しさに眼を伏せ、急ぎ足で帰つていく。

世津は柳田様を見送つた足で縁側へ行き、庭を見る。風

吉が庭石に腰を下ろし休んでいる。誰に貰つたのか葉煙草を吸っている。芳ばしい香りが風に乗り世津の鼻腔をくすぐる。世津は福寿草の鉢に視線を落とす。枯れ落ちた花弁が根元で土に還つていく中で、葉と茎は風吉の水やりのおかげで青々としている。

福寿草が枯れてしまうことは、征一郎との絆もなくなる。まだ葉や茎となるものが残っているはずだ。それを自ら確めねばならない。

「風吉、畝の土盛りがうまくなつたじゃないか」

心が固まつた世津の威勢のよい声が庭で弾ける。世津に気づいた風吉が、慌てて葉煙草を捨てた。

(三)

連子格子の影が壁に映っている。問屋場の常夜灯の明かりは夜中じゅう消えることはないらしい。外のざわめきが微かに耳に入る。それにもまして壁の向こうの部屋からはまだ夕餉が終わっていないのか、器の擦れ合う音や男達の歓談の音が聞こえてくる。たしか町人らしい男衆五人が入つていくのを、手水に立つた折見かけた。時々、飯盛り女

のもてなすつわずつた声が男達の声に混じる。

床に入った世津は、頭を横にして連子格子の影をぼんやりと見ている。二日前の朝、まつに抱かれた矢之助が後追いで泣く顔が、今だに頭に張りついて眠れない。

それと、明日の夕刻には台入に着き、征一郎に会えることで胸がざわついていた。訪ねることは文で伝えているが、どのように話をすればよいのか、考える程に気が高ぶつたり滅入つたり落ち着かない。仕方なく連子格子の影の数をかぞえたりする。それでも眠れず、世津は隣に床を並べて寝息を立てているみよを起ささないように、そつと起き出し格子の手前の障子戸をゆつくりと引く。

いちどきに外の喧騒が入ってくる。宿場町は一晩中にぎやかな所だ。常夜灯のもとに、男達が昼間の熱気を引き摺つたまま、しばしのやすらぎを求めて次々とやつてくる。

真向かいの旅籠屋の前に荷を積んだ馬が引かれてくる。馬子の手際よく荷を下ろしている。上半身裸でこの夜更け寒くないのだろうか。馬子の日に焼けた肌は常夜灯の明かりを受けて鈍く光っている。入口の奥では、さつき駕籠から下りた侍が洗ひ桶に足を入れ濯いでいる。そこから二軒目の旅籠屋の前で、疲れた町人客を奪い合う留女の金切り声が夜空に響き渡る。

「眠れないのですか」

みよの声にはと我にかえった世津は振り向く。横になつたまま、みよがこつちを見ている。つるりとしたみよの肌が、外の淡い光りを受けて更に美しい。

「はい、箱枕になじめなくて……」

「そんな嘘はお見通しですよ。色々とお心が乱れておいでなのでしょ」

「……」

「明日は早いですよ。しつかり休まないと、また足がつりますよ」

「はい、わかりました」

世津は道中足がつつて動けなくなったことを思い出し、慌てて床に戻る。

「私は世津様を無事台入までお連れすることを、柳田様とお約束しております。冷たい夜気に当たって、おかげでも召されたら、申し訳がたちません」

みよは天井を向き口を尖らせる。柳田様から宛がわれた柳田家親類の年増の下女みよは、分別のある女だ。当家に三十年以上も仕え、既に御公儀から忠義者として表彰されている。御新造さんの旅のお供も仰せつかつてきたせいか旅慣れしている。世津は静かに目を閉じる。やはり眠れず、

再び壁に映つた連子格子の数をかぞえる。

明朝、世津とみよは宿を発つ。路銀はきりつめなくてはならないが、みよもいることだしと中宿にしていたが、意外に安く二人分の二百五十文を世津が支払う。店の居並ぶ宿場町は、昨日の夕刻とはまた違った様相を見せている。魚屋、八百屋、乾物屋、果物屋、小間物屋の揺れるのれんの間を歩くのは心まで華やいでくる。ねぼけ眼の店子がせわしくはたきをかけている。ふと思いついて、世津は果物屋でみかんを買う。

「おみやげ買って、一安心ですね」

外で待つていたみよが、みかんを包んだふるしき包みを世津の手からそつと受け取り、肩に背負い込む。

「この街道をひたすら歩くだけです。途中、川越えが難儀といえば難儀ですけど、それを過ぎればすぐです」

街道には賑わいがある。脇を飛脚が風のように走つて行く。首から荷物を下げた行脚僧がゆつくりと歩いている。

擦り切れた草鞋のひもを結んだ足が、土埃で白っぽくなっている。たいそうな箱を背に担ぎ、闊達な足取りは薬売りだ。陽気な二人の女子衆は、身勝手な抜け参りなのか。藍染めの頭巾を被り、肩に小さな風呂敷包みを背負つ我ら女

さ

「おしやるとおりだけど、そももいかないの」

人足は、客に立ち入つた後の引き際を心得ていると見え、急に黙る。静かな川面に沈黙がゆつくりと落ちる。川面に映つた上半身が人足の動きが作る波に揺れるのを、世津はじつと見つめる。

川を渡り終えた先の街道筋には、松林が広がっている。松を透かした奥には真つ青なものが見える。若布の匂いがある。これが潮香というものだろうか。もしや、海。一度絵で見たことがある。青く広く、異国へとつながっているという海。

「みよ、あれが海というものですか」

気持ち昂ぶつた世津に、みよが落ち着いた口調で答える。

「そつでございますよ。美しいですよ。今被っている頭巾の色も素晴らしいですよ。海の青は深く、誰も真似のできない色です。丁度、あそこに蕎麦屋がありますよ。お昼にいたしましよ」

松林の奥に、一膳飯屋を兼ねた蕎麦屋がある。旅慣れしたみよに従つのが賢明だと、世津は思う。そばと書いたのれんをくぐる。長机に座つた旅人のそばをすすする音が、旅

る。
「話しなどは、まどろっこしい。首に縄つけて引つ張つてくるんだよ。男と女というものは少しは強引さがあるの

いきなり人足が声をかける。世津は驚いて、人足の豆はちまきの後頭部を見つめる。

「仕官を放逐した夫の所へ、話しに行つて居るのです」

世津は、人足の風にゆれる薄い髪の毛に誘われて口が滑る。

の緊張で忘れていた空腹を思い出させた。世津がそば二人前を注文する。窓際の長机にみよと向かい合つて座る。開け放たれた窓には海が広がっている。はるかかなたに小島が浮かぶ。

「異国の島とは、あれのことですか」

世津の問いかけに、笑つと皺に囲まれるみよの小さな目がきらりと光る。

「ほほほ、異国はここからは見えませんよ。とてもとても言葉では尽くせない程遠いのです。朝鮮の御正使様が、この海を渡つてたびたび来られています。どのような出で立ちか一度拝見したいものです。御正使様は江戸まで行脚なさるそうですよ。江戸では見物人が押し寄せ、大変な騒ぎらしゅうございますよ」

みよはどこで聞き知つたのか、自慢気に披露する。

「旅はよいものですね。こうして新しい知識を得る機会になります。夫がその機会を作つてくれたともいえます」

「そのように良い方に考えることも、一つの知恵ですよ」
姉気取りのみよは薄い唇に笑みを浮かべ、老女が運んできた蕎麦をすすする。

世津の実家は婚家と同じ下級武士で、年中質素儉約に縛られた暮らしぶりは旅をするゆとりなどなかった。母が肝

の臓の病で亡くなった後、父は後添えを貰わなかった。世津が下女と身の回りの世話をしていたが、その父も母の死から三年後に亡くなった。

今では弟がお庭番の跡目を継いでいる。抜け参りすらせず家の中だけでこまこまと生きてきた母を、世津は不憫に思つて、残りの蕎麦の汁を口にす。

「さ、ここを出ましよう。夕刻前に着くにはゆつくりできません」

四十文の支払いを済ませ蕎麦屋を出る。歩き始めると潮の香が強く鼻腔を刺す。世津は思わず頭巾の端で口元を覆う。時折、海からの強い風が着物の裾を翻つては去つていく。右手に臨む海は陽が傾くにつれ、刻々と色を変えていく。左手に小さな家屋が軒を連ねている。

「漁師の村ですよ。路地の奥に征一郎様の実家があるはずですよ」

みよが指差して言つた。征一郎と会うことを前にして、波の音が不安げに世津の耳に響く。やっと人がすれ違えるほどの路地に入る。傾きかけた陽は、黙つて先を行くみよと後につく世津の足元に暗紫色の影を作っている。

行きついた所が広い庭で、そこに花の鉢が並んでいる。今から時期の菖蒲、剪定した菊苗、梅、茎葉の形の違いで、

これ程までに種類があつたのかと驚かされる福寿草の鉢鉢は家屋の板塀まで並んでいる。板塀の下方は朽ちており、茅葺屋根は風で飛ばないように所々石が置いてある。

突如入口が開き、男が現れる。手に桶と柄杓を持つている。鉢に水やりを始めようとしたが、二人の女人に気づき顔を上げる。男は紛れもなく征一郎だ。仕官から遠ざかつた征一郎は月代に剃刀を当てることもないのだらう。毛髪が伸び無精ひげが目立つ。継ぎの当たつた野良着が哀しかった。しかし、日焼けして痩せた顔には精悍ささえ感じられた。

「征一郎さま」

世津は呼んだ。征一郎は一度世津をじつと見つめ、近づいてきた。

「世津……よくぞこんな所へ来てくれた」

みよが慌てて深く頭を下げる。征一郎も会釈する。

「連れの女人もお疲れのことだらう。汚いところだが、中へ」

征一郎は桶と柄杓をその場に置き、家の中へ二人を招き入れる。擦り切れた畳間に上がる。黄はんだ襖越しに老人の咳が聞こえる。

「先だつて柳田からも文が来て、そなたが来ることは承知

していた。胸の内のどこかで待つていたし、またどう話そうかとも悩んでいた。聞こえの通り、父つつあんは肺の臓を病んでいる。この私がいなければ何もでけん状態で、いや、この私でなければ世話も受けず、正直言つて困つておる。勿論、売り物の花も世話人がおらねば枯れてしまふ。父つつあんが長患いしておると聞いたとき、自分を失つた。勝手してすまない」

「征一郎は両膝をそろえ、じつと頭を垂れた。

「仕官の道はどうなさるおつもりですか。藩庁のお許しも得ずして放棄した形では、いくら寛大なお上も限界があると、柳田様がお話に來られました。来年の春までにお戻りにならなければ、あのお屋敷を出てゆかねばなりません」

世津は涙声になっている。気丈にしていた分、征一郎を前にはらはらと崩れていった。

「実の父つつあんは、この私にとってかけがえのないお人だ。もうしばらく、ここにしようと思つ」

征一郎の膝に置いた拳が小刻みに震えている。世津は、世一郎のなみなみならぬ覚悟をよみとつて、荒れすさんだ畳の目に視線を落とす。

「いつまでもお待ち申し上げております。矢之助も二歳になり、父上のお顔も存せぬままでは不憫でなりません。そ

れに、あのお屋敷を離れることは耐えがたいことです」

世津の絞り出す声は征一郎の胸に響いた。
「わかつておる。今しばらく時の猶予を。そなたには苦勞をかける」

くもった口調の征一郎はうつむき、目は世津の膝元に注がれている。世津は立ち上がり土間に下りる。みよに支えられ外に出る。陽はとっぷりと暮れ、夕餉をこさえる籠の煙が家々から立ち昇っている。ふたりは路地に向かって歩き出す。父親の激しい咳き込みが追いつくように聞こえてきた。

(四)

世津はまつと産屋の用意をしている。

「御新造さん、行き倒れの妊婦さんはこんな場所があれば助かりますよ。無事産みたくとも叶わない事情を抱えた女人は多いですから」

まつが声を弾ませ、壁板を拭く手にも力が入っている。

「そうだね。私らがここに居られるのも後一年足らずかもしれないから、存分にやりたいことやっておこうと思つてね。もし狭い武家長屋にでも住むことでもなれば、勝手

が違つと思つ」

世津の征一郎に会って何かふつきれた思いはまつにも伝わっていたのだが、一年の限りと知って、それが余程こたえているのか、汚れた布を桶に投げ入れ乱暴に洗つ。

「それはそうと、この風吉が編んでくれた太縄、どのあたりに下げようかね。ここに背もたれの布団を重ねるとして」

世津は太縄の先を持つて、鴨居と下の位置を見比べている。

「わたし、産んだことないのでわかりません」

まつがおどけた調子で言つて、持ち前の大きな目をくりとす。世津も口元を緩める。

「足台を使つても、鴨居に届かないようね。風吉にやつてもらいましょ。ここに来るように呼んできておくれ。そして、その足で陶器屋に行つて、胞衣壺を四、五個買つてきておくれ」

まつが快く返事をし、前垂れを外しながら産屋を出て行く。胞衣(えな)とは後産の臓物のことである。それを捨てずに大切に壺に入れ、子供の幸福を祈念し、座敷の床下や玄関の門下などに埋めるのである。望まれてきた赤子には、必ずやその仕来たりが成されている。程なくして風吉

が入ってきた。

「何の御用で？」

場違いな所へ入った戸惑いから、風吉が体軀を縮こませている。

「鴨居に、この縄かけておくれ」

世津が、子供の腕くらいはある縄を風吉に渡す。風吉が、おやすい御用ですと言つて足台を使い太縄を鴨居に通す。

世津が、先を産婦の目の高さ位に決める。

「御新造さん、この先不安があまりでしよつが、おいら、いつでもお役に立つつもりです」

足台から下りた風吉が、改まった調子になる。

「ありがと。これで縁日に遊びなさい」

世津は懐から小銭を出し、風吉の袖口に滑り込ませる。風吉が満面笑みを浮かべて、べこりと頭を下げ、畑仕事に戻っていく。腰にからげた麻着の裾が従順な犬の尻尾に見える。世津は微笑む。

概ね出来上がった産屋を見回しながら、世津は深い吐息をつく。ここは産み女の駆け込み寺といった役目を果たすことができればよい。無事産んだものの、育てられない女が多々いる。間引きを強要された女は氣丈に赤子を踏み付けているが、心の底では泣き叫んでいる。女の痛恨の叫び

をどれほど聞いてきたことが。やるせない思いから少しでも開放されたい。世津はそのために産屋を用意したのであつた。征一郎も、今は生まれた土地で花作りと実父の世話に精進している。いつか必ずや、供に暮らす日がくると信じている。

一月半前、征一郎を訪ねた日のことが甦る。話し終え、征一郎の実家を出て歩き出した時、この先夜道危ないから泊まつていけと、征一郎が追いかけてきたが、泊まる気にはなれなかつた。

どつにか見つけた寺で一夜を請い、夜露を凌ぐことができたが、世津の中に鬱々としたものが渦巻いていた。それは帰路を暗く覆い尽くしていたが、あるきっかけて霧散したのであつた。

空はどんよりと曇り、海の色も鉛色で、押し寄せる波の音が引き摺る足枷の音に聞こえ、世津とみよの足取りは重かつた。後に付くみよが世津の袖を引くので振り返ると、はるか後方に毛槍を高く掲げた奴の姿がある。武人の行列である。駕籠あり、馬あり、松林を透かしても尚も延々と続き、それは尽きることのない蟻の行列にたとえられる。

「参勤交代の大名行列なのでしょう。私は道端に土下座致

します」

みよの声に世津も身分上躡きよし、頭を垂れる。向かい側には、急ぎよ駕籠から下りた女人が駕籠持ちと肩を並べて土下座している。見るところ妊婦のようだ。お産のため遠い実家へ行く途中と見受けられる。行列は足音をせわしく響かせ、少しずつ近づいてくる。どうも女人の様子がおかしい。うずくまって喘いでいる。産気づいたようだ。毛槍の奴が前を過ぎる。次に先番閑札渡しの駕籠が通る。女人の抑えた呻き声に世津は落ち着かない。きんの教えをふと思ひ出す。

「産婆という者は、大名行列を横切つて、お産の手助けができるのだよ」

曲がつた背筋をぐいと伸ばして、誇らしげに言つたきんの幻に後押しされるように、世津は立ち上がり前に進み出た。みよの驚きを背中に感じる。鋭い眼が世津を取り巻く。「わたくし、決して怪しい者ではございません。産婆の世津と申します。向こう側に産気づいた女人がおります。何卒、手助けをお許し願いたく存じます」

世津は頭を地につけた。手の平が汗をかき、なぜか矢之助のことが頭をよぎつた。すぐに御用取次に話が届き、それが駕籠の女中付き医師の耳に入ることに相成つた。早く

いもがら汁と七分がゆの夕餉を終え、寢屋で矢之助を寝かし付けていると、まつが手燭を持つてやつてくる。

「外で女の泣き声があります」

耳をすます。確かに女のすすり泣く声が聞こえる。風吉もやつてくる。門の外に女がいると言つ。世津は、まつに提灯を用意させ家を出る。月のない闇の中で女が蹲っている。提灯の明かりを近付ける。女はゆつくりと顔を上げた。煤けた顔の中で目がおびえている。小さな風呂敷包みを抱かえた胸の下に腹が大きくせりだしている。

「如何なされたのですか。お見かけは、もう生み月に入つていると察します」

世津は、女人の腕を取り話しかけた。

「はい、そうでございます。夫が今度も間引きするように強く申すものですから、絶え切れず出てきたのです。道すがら、ここは産婆様のお家と聞きました。どうか助けてください」

女人は声を絞り出すように言つた後、溜飲が下がり声を張り上げて泣いた。

「すぐ、中へ入りましょう」

世津とまつは女人を両脇から抱かえ上げ、玄関を通り産屋へ連れられた。布団を広げ、女人を寝かせる。女人は安堵し

行つておあげなさい、と思いがけなく優しい医師の言葉に世津は行列の中を走り抜けた。

その後のことは、無我夢中でよく覚えていない。女人に感謝され、自分を役立てる道があつたことに改めて気づき生きる明るさがわいたことは確かだつた。

「御新造さん、胞衣壺五個買つて来ました」

まつの声に世津は我に帰る。まつが大風呂敷にくるんだ胞衣壺を大事に抱え立っている。

「ごくろつだつたね。そこに並べておくれ」

世津が産屋の隅を指差す。まつが返事をして、壺を置く。素焼きの丸っこい形の壺は胎の子が並んでいるようにも見える。胞衣壺は、望みがあればこの屋敷門下に埋めてあげてもよいことにしよう。

「今日はお疲れだつたね。と言つても馳走できるわけではなし、これ縁日に使いなさい」

世津は、風吉同様まつにも小銭を与える。まつは子供のよつな笑顔で台所へ向かう。

(五)

て大きく息を吐いた。

「中には、赤子の産着とおしめが入つております。ひとり育てる覚悟で出て来ました」

女人は、傍らの風呂敷包みを見て言つた。

「ここは安心して産める処ですよ」

俵を入れこんだような腹は、数日中には産まれるだろう。まつが、埃にまみれた足を温湯で絞つた布で丁寧に拭く。

「どれだけ、この手で赤子の息の根を止めてきたことか。

布団にくるんで踏みつけたりもしました。濡れた紙を仏のような無垢な顔に被せもしました。今も足裏に残つています。赤子の肉の柔らかさが、身も心も裂けそうです。今度また間引きするように言われたけど、できません」

女人は顔を両手で覆つて激しく泣いた。もう夏がくるというのに、かさついた手の甲や割れて黒ずんだ爪が痛々しい。まつが白湯をついだ椀を運んできた。女人は両手で椀を持ち貪るように飲んだ。やせた首筋に喉がごくりと音を立てた。

「どこから来たのですか」

埃にまみれた足や乱れた髪、破れた小袖の裾からずいぶんと歩いて来た趣きに、世津は訊いた。

「浜から来ました。とにかく夫から逃げたい一心で歩き続

けました。途中茶屋で休んだり、お寺に泊めて貰ったりしました。そこで大分心配していただきましたが、夫が追いかけて来るようで、雨の中をも歩き続けました。よくぞ流れなかつたと自分でも驚いています」

「ほんとにまあ、母というものは強いものですよ」

世津がそう言った後、突然女人は呻き出した。大腹が収縮を始める。産まれるのだ。気持ちの安堵がお産を促したのやもしれぬ。世津は、女人を起こし、まつに布団を背凭れとして畳ませる。女人をそこへもたせかけ、下がった繩を掴ませる。座産だ。女人の顔や首に汗がにふき出し、べたついた頭髮が汗で異臭を放つ。発するいきみ声を口の中でかみ殺し耐える姿に女人のこれまでの辛苦を垣間見るように世津は哀しかった。まつが濡れた布で女人の顔や首を拭いている。

「こうして、腹の肉が赤子の頭が下になるのを手伝っているのですね」

陣痛の、波のように引いては押し返す腹部の動きに、まつが感動の声を上げる。当時、彼女らは元々胎児は逆さに入っていることなどまだ知る由もない。胎児は頭を上にした位置におり、陣痛によって頭が下に返ると考えていた。

まつが湯を沸かしに台所へ戻る。程なく産まれた子は女

子だった。まつとふたりで赤子を湯に浸からせる。どっと疲れが出た女人は吸い込まれるように眠りについた。

翌朝、世津が朝餉を産屋に運ぶ。女人は帰る仕度をして

いる。
「本当にありがとうございました。この子は何とか自分で育てていこうと思えます」

まだふらつく頭を下げる女人の顔色は優れない。

「まだ無理ですよ。産んだ後が大事ですよ。それに乳飲み子を抱かえて、奉公先などおいそれと見つかるものではありません」

「でも、このまま居ることは迷惑かと…」

「四、五日この産屋で休みなさい。そして家にお戻りなさい。どのような鬼の父親も、数日たった我が子を殺せとは言わないでしょう。帰る時は駕籠を用意してさし上げましょう」

「何から何までありがとう存じます。名をなののが遅うなりました。たよと申します。ご好意に甘えて、しばらく休ませていただきます。でも、お若いですね。産婆と呼ばれるのがお気の毒なくらい。もっと違った呼び名があつてもよさそうですね」

たよが逆に世津を憐れむように見ている。

「その事がどうかありませんか」

世津の眉根を寄せる顔に、たよは訊く。世津は一部始終を話す。

「そうでしたか。仕官の道を放つて実家に戻るとは、お産婆さんもご苦労が多いですね。この頃、豪商や豪農が武士の株を買つて子に与え、武士にさせるといふ話を聞きますが、果たして子が望んでいるかどうか、わからんものですね」

たよは赤子に乳をふくませているものの、目は遠くを見ている。乳が出ず、赤子が大声で泣く。

「考え事をすると、お乳の出が悪くなりますよ」

現実を引き戻された世津は、たよの黒ずんだ乳首をつまむ。白い乳汁が細い孤を描いて飛び散った。再び乳をふくませるたよの顔はふくふくしている。ふと世津は手桶が損じていたことを思い出す。

「赤子の頭をすすぐ手桶を買ってきますね」

世津は産屋を出て、自ら買いに外へ出る。ひとりになりたかつた。瓦屋根に照り返す初夏の陽射しに世津は目を瞬く。下級武士の粗末な屋敷が並ぶ通りを抜け町屋敷へ入る。紺屋町を歩いている時、路上で人々が奔っているのに遭う。主もおかみも老人も、下男下女までが何かを待つ表情で

道の端に幾重にも並ぶように佇んでいる。どの顔も悲愴と興奮の入り混じった面持ちで、時折風に舞う土埃に顔をしかめて桶屋町の方を見ている。世津も足を止める。話し声が耳に入る。

「こんなところ、引廻しがなかったからかしら。こんなに人が仰山集まるとは思いもせんかったな」

「どこぞの女房が口先を尖らせて声をひそめる。

「そりゃもう、びっくりしたな。人は見かけによらないものだね。あの御新造さんには、主人が俳諧の指南受けていたけど、敵しくて何度もやり直しをさせられ辟易していたというのよ。男と駆け落ちするようには、とても見えなかったと驚いているの」

相手の女房がそう言っただ遠慮がちに笑う。

「以前は白粉も紅もつけなかったのが、若い庭師が出入りするようになってから朝から念入りに髪は結つわ、顔首はもちろん手までこつてり白粉つけてたっていつじやないか。色恋とは恐ろしいものだよ」

「わかっていただろうよ。不義は斬首になることは。夫君はお目見え以上というではないか、許すわけないよね」

「子供もなく、淋しかったのじやないのかい。出入りしていた妻が孕んだとなりゃ、正妻も面白くないよね。若い男

清々しささえ感じられる。

それにしても、若い庭師の馬から下がった脚のなんとつややかで逞しいことが。世津は哀しくなって、その場を離れ歩き出す。

男と女の強さ激しさを目の当たりにして、世津は心がかき乱されていた。征一郎と我とのつながりに思いが及ぶと世津は深い溜息をついた。離れていればなおのこと、櫛に施された飾り硝子のように脆く儂いものに思われた。

ほんのひとときであっても、燃える男と女に身を竊した俳諧のお師匠さんが羨ましくさえあった。斬首をひと目見ようと、横を通りすぎて行く人の群れが、風吉がいつぞや話してくれた飢饉の時の飢えさまよう人々と重なる。

心の貧しさと食の貧しさと同じなのかと、世津は空を見上げる。ゆっくりと流れる白い雲にしばし目を奪われる。

(六)

朝から雨が降っている。屋根を叩きつける雨音と時折轟く雷鳴に、この頃走り回るようになった矢之助も世津の膝の上で目をつむり、小さな手で耳をふさいでいる。

激しい雨音はたよの号泣と重なり、軒下の雨だれはたよ

と楽しく憂き晴らしてことだったのかしら」

「色々あるうけど、その代償は大きいよね」

「ほらほら、来たよ」

女房達の立ち話について聞き入っていた世津も馬の蹄の遠い音に耳をすます。程なく、馬上に背中合わせに括られた男女の姿が遠目にわかる。人々は目前に来るのを息をのんで待っている。頭がじゃまだ、と叫ぶ者さえいる。

「何でも、お救い小屋に二人で紛れているところをお縄になったという話だよ。どう、ぼろを着てもあの御新造さん目立つよな。きりりとして餅肌だし、食いつばぐれの貧しい女には見えねえ。しかし、男は若すぎる。これからいくらでも若い女と遊べたのによ。惜しいよね。へへへ、おいらもこれつくつてみるかな」

どこぞの大店の旦那らしい男が小指を立てて目を細める。

「そんなことすりゃ、俺んとこの女房、包丁持って喚くこと請け合いだ。おお恐え」

相手の頭の禿げた男はそう言っただ体を縮める。そこへ馬が通る。馬上に括られた男と女は俯いているが、笑みさえ浮かべ、目は一点を見つめたままだ。まるで、これから冥土で晴れて夫婦になれる喜びでも秘めているかのよう

の涙に見える。四日前、赤子が突然の発熱で死んだのだ。体中黄色くなって、お医師様の手当ても虚しく息絶えた。

結局たよは三廻り産屋にいた。何とか家に戻ろうと心の準備をしていた矢先の出来事で、たよは呆けたように産屋にこもっている。元気を取り戻すには日数がかかりそうだが、突然、雨音の中に激しく木戸を叩く音がする。まっが走ってくる。

「炭屋の若おかみさんが産気づかれたそうです。今、使いの者が御新造さんに、早く来て下さいと言っています。駕籠が用意されています」

「すぐ行く」と伝えておくれ。合羽と番傘と高下駄を揃えて、風吉を呼んでおくれ。この子の世話をたのみます」

この二、三日産み月に入っている炭屋の女房すまが気がかりだったのだ。先月、男女の引廻しの時、女子衆の中に見かけたが、人ごみに阻まれ話しかけられなかった。顔色が悪かったのが頭に残っている。

帰りは駕籠とは限らない。すっかり雨具の用意は怠ってはならぬ。むずがる矢之助を風吉に渡し、臍の緒を切る鉄などの入った道具箱を持つ。世津は急いで待っていた駕籠に乗る。濡れそぼった使いの者はそのまま駆ける。

走る駕籠の屋根を叩く雨の音が頭の上で踊っている。世

津は、そつと駕籠の引き戸を少し開けてみる。道も町並みも雨に白くけむつて定かではない。雨の勢いは止みそつもない。誰ひとり歩いていないと思つていと、継飛脚が雨を切つて目前を過ぎていった。世津は引き戸を閉ざす。

しばらくして駕籠が止まる。炭屋に着いたのだ。世津は駕籠から下りて家の中に駆け込む。すまの呻き声が家全体を重苦しくしている。下女に案内され母屋に入る。すまの苦悶に歪む顔や首が、水を被つたように汗で濡れている。「夜中から苦しんでおりましたようで、なんとかしてくださう」

傍に座つてゐる姑が頭を下げた。

「産気づくのが遅くなり、赤子が大きくなりすぎたのでしよつ」

世津はすまに息を入れる時を教え、腹を押す。かたく張つた皮膚の下に、赤子の頭が手の平に伝わってくる。力ないすまの声が母屋に激む。

「前の時はすぐ産まれた。女子じゃつたが」

姑の声に棘がある。すまは青竹を握る手に力が入つてもいきみ出すまでに及ばない。赤子の早く出ようと肩の位置を変える動きが、腹に置いた手の平に伝わってくる。だが腹の肉に力が入らない。このままだと……。その時姑が襖に

向かつて叫んだ。

「お医師様を呼んできておくれ」

下男の走り去る大またの足音がした。

「親戚がお医師様に産ませてもらったと言つておつたから」

姑は手をこまねいている世津に険しい目を向けた。程なく法曹の姿をした医師が入ってくる。頭髪を剃り落とし、口髭をたくわえている。

「お医師様、なんとか赤子だけでもお願いします」

姑が、布団の裾に座つて手早く道具箱から器具を出している医師に言った。それは見たこともないものだった。黒く長いひも状のもので円を作り、さし入れる。ひもの先を小さな板に開いた三つの穴に通す。医師はひもの先を持ち、じつと動かぬ姿勢で顔を横に傾け耳をすますようにして、胎内をさぐつてゐる。何を？ 赤子の頭に決まつている。世津は、呆けたように医師の所作に見入つてゐる自分に活をいれるように考えを巡らす。

姑も体を強張らせて、医師の手の微妙な動きを見ている。どれ程の時がたつたのか。短かつた気もするし、長かつた気もする。突如医師はうつ、と言つて鼻で息を吐き、ひもをゆっくり引く。血の滲んだひもの先に赤子の頭が出てき

た。赤子は医師の手に抱き取られると、手足を震わせ産声を上げた。

「おのこじゃ」

姑の喜びの声が家中に響き渡る。襖越しに待機していた下女に湯の用意を言いつける。すぐにたつぷり湯を張つた盥が運ばれる。

「よかつた。よかつた。やつと男じゃ」

姑は慣れた手つきで赤子を湯に浸からせてゐる。医師はぐつたりしたすまの心の臓を診る。医師はすまの死を告げる。姑は驚いた風もなく、すまの死顔をちらつと見ただけで赤子に白い産着を着せてゐる。

「甲いの仕度もせないかな。この忙しいさなかに大変じや」

姑は男子の産まれた喜びに頬は弛みつばなしだ。赤子の元気な産声が母を失つた嘆きに聞こえる。医師がいれば後には用はない。世津は部屋を出た。下男に、すまの死をだんなに知らせるように言った。

「だんな様は腰痛めてはつて、三日前から湯治に行つてあります」

「それじゃ、妻の死を知るのはいつのことだろうね」

「ここにも身勝手な夫がいるものだ、と世津は思い、母屋

から出てきた下女にすまの体を拭いてあげるように言った。「その前に、おかみさんから重湯炊くように言われています」

重湯で世津は閃いた。乳が出て仕方のないたよを乳母奉公としてこの炭屋に出向かわせようと。一時気が紛れるかもしれない。

通りに出ると、雨は小止みで空があかるんでいる。大げさな雨具の用意がうつとうしかつた。世津は歩き始める。

町並みは再び活気を取り戻している。まだ濡れそぼつた店ののれんが風に揺れ、店先の水溜りに丁稚が裏の竈の灰をかけてゐる。

金魚鉢の振り売りが水溜りをよけて足早に通り過ぎる。大きく鉢は揺れるが落ちはしない。老人の冷水売りが通る。

「ひやつこい、ひやつこい」

低く掠れた声が耳に心地よい。

「一ぱい、くださいいな。砂糖なしでお願いね」

世津は冷水を求めぬ。道端で三十路前の女が水をあおるのははしたない気がしたが、喉のひりつくような乾きには勝てなかつた。老人は、へいと返事をし、なみなみと水をついだ真鍮の水飲み碗を世津の手に渡す。水を飲む世津の中で、赤子の元気な産声や姑の赤子を洗う器用な手つき、

すまの黄色くなつた死顔、思いがけなく目にした医師の助産の所作、それらが駆け巡っていた。世津は碗を老人に返し、四文を支払う。

小雨の中を、振り売りがどこからともなく集まつたように行き交っている。かつおぶし、ところてん、南蛮菓子、酒、しょうゆ、かれらは食べ物の甘い香りと威勢の良い呼び声を残して去って行く。征一郎は花の振り売りをしていると、たよが言っていたことを世津は思い出す。通り過ぎる振り売りの男達に征一郎を重ね、うずきだす諦念のようなものが、両手に雨具を持ち歩く世津の足取りを重くしていた。

(七)

雨の上がつた朝は、矢之助も機嫌がよい。梅雨の中休みといったところだが、じめつとした暑さは汗ばむ程だ。庭に敷いたござの上で、矢之助は風吉が作った馬の藁人形で遊んでいる。時々それを放り投げては笑い転げている。屈託のない笑い声は、梅雨の不快さを吹き飛ばす。

「おいらが、じき竹馬こさえてやるからな」

風吉が藁人形を拾ってきて矢之助に話しかける。身分の

上下を忘れた風吉の気さくな物言いは、親しみこそあれ嫌味はない。

「まだいくら何でも、竹馬は無理ですよ」

縁側で目を細めている世津の声が弾む。つい三日前たよが炭屋へ乳母奉公に入り、世津はほっとしている。それはともかくとして…と、世津は一点をみつめたまま考える。

もう、私の役目は時代から遅れたものなのか。先だって、蘭方医の助産術を目の当たりにした衝撃は消えない。あのままであれば母子ともに死すところを、赤子は助けることができた。あの道具は探領器というもので、鯨のひげで作ったものだ。先日炭屋の斜め向かいに居をかまえる蘭方医を訪った際、教えてくれた。江戸では墮胎も行なわれていると話していた。大きな時代のうねりが知らないうちに渦巻いている、と感じた一日だった。

世津は庭に視線をゆっくりと戻す。矢之助が歩いていき、福寿草の茎を引く張る。風吉が慌てて矢之助を抱き上げ、ござの上に連れてくる。福寿草が無事でよかった、と湿っぽい風が語りかける。まつがいつの間にか世津の横に来て一緒に見ている。

「矢之助様は病にもかからず、大きくなられましたね。旦那様に一度お見せしたいですね。あ、申し遅れましたが昼

餉のしたくができました。ふだん草のおひたしと豆腐やら貰った使い物にならない大豆の煮たのですが、よろしゅうございますか」

沈黙した世津の表情を見て、慌てて昼餉の話しに切りかえたまつは汗がにじんでいる。

「それで十分よ。お豆は矢之助の好物です」

台所から煮豆の甘い匂いが流れてくる。まつが、風吉を見て思い出したことを話す。

「この前の不義の若者、風吉と同じくらいの歳でしたね。つい人並みにもまれて行き首刎ねを見たのですが、二人とも見事な最後でした。泣きもせず喚きもせず、黄泉の国で一緒になるのだと誓い合ったように凜としたものでした」

まつは、残忍なお仕置きにも負けない男と女の結びつきに心動かされている。まつは今年四十になる。この先も鼻を通すのかと思うと可哀相な気がする。いつぞや佐乃がまつを嫁に出そうとしたが、まつは断固としてきかなかつた。亡くなった大だんな様には大層世話になった、一生かけて恩返しせねばならないと頑なに拒んだのだ。

「まつも、これから恋を試してみるかい？」

世津はまつにちよっかいをかけてみる。まつは目尻には数本の皺が刻まれ顎はたるみ、女の盛りはとうにすぎている

るが、身も心も一点の曇りもない純な女だ。

「はい、ありがたいお言葉つれいですが。でもまだ矢之助様のお世話もありますし、産屋のこともあります。恋など…」

まつは顔を赤らめ、前垂れの裾を両手で弄んでいる。

「まつ程の者は、その内御公儀から表彰されることになるだろうよ」

世津は、そうならなければまつは救われなと思った。

「実は、わたし柳田様を心からお慕い申し上げております。でもあまりにも身分と歳が違い、叶わぬことだと自分に言い聞かせてきました。五十近い俳諧のお師匠さんでも若い男をものにされました。このわたしだって、とつい思ってしまう。でも勇気がなくて…。すみません、こんなこと初めて口にしました」

まつは目は潤みを帯び、心の臓の動きが伝わってきたように心が昂ぶっているのがわかる。

「まあ、少しも気がつかなかったよ」

本当に何もわからなかった。ひとつ屋根の下で寝食を共にしていながら、何と人の心の内が見えていないことが夫婦でも同じだ。征一郎の心の壁にひそむものに気づかなかった。人と人との関わりとはそのようなものなのだ。

世津は、まつのはにかむ顔の奥にまだ隠されたものがあ
る気がして畏れすら感じた。昼餉のため居間へ向かおうと
した時、玄関に訪う声がある。柳田様だ。

「噂をすれば何とやらだね」

世津とまつは玄関へ急ぐ。柳田様が入口の土間に立つて
おられる。いつになく清々しいお姿、双ほうにも輝きがあ
る。袴もあつらえたばかりの、それこそ旅で見た海の深い
色合いで艶やかなお顔によくお似合いだ。

「これはこれは柳田様、お久しぶりでございます。目も洗わ
れるような凜々しいお姿。何ぞ良いことでもございました
か。上へお上がりください」

「いいえ、ここで結構です。このたび私、松林家へ養子に
迎えられることに相成りました。この秋には祝言を挙げる
運びでございます。その知らせに、今日は参った次第で
す」

柳田様は深く頭を下げられた。剃りあげた月代が初々し
く目に映る。

「松林家といえば奥右筆、本当にようございました。柳田
家も鼻が高くなるというもの、御両親様も兄上様もさぞや
お喜びのことでございますよう」

世津はそう言ったものの、突如胸の内を吹き抜ける風に

戸惑っている。

「はい、兄上はとうに嫁を買っておりませぬ故、私は部屋住
みの身でした。よい養子先の話がくるのを待っておりまし
たが、そのかいがありました。祝言を挙げた後もたびたび
寄らせていただきます」

淋しい世津の目に柳田は明るい声を送る。

「どうぞお幸せに。これまでありがとうございました」

世津はほっかり空いた胸の内を悟られまいと気丈に言葉
を継いだ。柳田は、傍でしんみりしているまつにも一度笑
顔を向けて踵を返す。足を踏み出したところで、ふいに世
津の方を振り向く。

「征一郎殿はこの辺りを花の振り売りに回っておられると
の噂を耳にしました。その内にこの家に足を留めることも
あるかもしれません」

「え、それは本当ですか」

世津の目にきらりと光りが宿る。今にも征一郎の花を売
る声が聞こえてくるようで、世津の胸が騒いだ。世津は外
に走り出て、征一郎の姿をさがし求める。

仕官の道など、もつどうでもよい。親子三人連れ添って
生きる道を選ぼうと世津は考えていた。まつがいつまでも
柳田様に手を振っている。

推薦 ひわきゆりこさん

「海」(福岡市)59号(平成16年10月1日発行)より転載